

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「カサンドラ症候群」

「カサンドラ症候群」とは、正式な診断名ではないが、パートナーが発達障害（ASD等）のため、家族がうまくコミュニケーションが取れず、心や身体に不調が出ている状態のこと。妻が発達障害と診断されたある家族を紹介する。～発達「障害」でなくなる日 朝日新書～より

夫：真面目できっちりした性格。

妻：明るくおおざっぱな性格、時間の感覚がなく遅刻が多い、職場の人間関係になじめず、どの仕事も長続きしない、段取りを考えて動くことや金銭管理が苦手。

妻は夫にいつも怒られていて、家庭の中はギスギスしていた。周囲からは「努力が足りない」「性格の問題」といわれていたが、何か他に原因があると考え、夫婦でメンタルクリニックを受診した結果、ADHDとASD、適応障害と診断された。

ある日、夫が帰宅すると、雨が降っているのに、布団と洗濯物がベランダに干しっぱなしになっていたので、妻を責めた。土鍋の洗い方（夫は洗剤を使わずに金たわしで洗う、妻は洗剤を使って洗う）でけんかになったこともある。

布団事件と土鍋事件が続いたため、発達障害者支援センターに相談をした。①雨の日は洗濯物を干さない、②台所の使い方は、普段台所を使う奥さんのやり方に合わせるというアドバイスをもらい、夫婦で合意した。

夫は、友達との距離感がつかめなかったり、こだわりが強かったりする4歳になった息子のことも悩みの種だった。ある夏休み、家族で恐竜博物館を訪れたとき、普段は聞き分けがなく、落ち着きもなく、手を焼いてばかりの息子が、夢中になってハンマーで石を砕き、化石の発掘体験をしている。そのとき夫は思った。「ああそうか。自分は環境に合わせることでばかり考えてきたけれど、環境の方を合わせることができれば、こんなにも輝けるのか。変わるべきは、心を開くべきは、自分のほうなんだ」と。

それから、夫の考え方が変わった。自宅の片付けは、プロのサービスを利用する、お金の管理には、用途別の袋に小分けに入れる、アラームには、「ご飯の時間だよ」「起きる時間だよ」という家族の声を録音して鳴らすようにした。妻に求めていた家事も、できるだけ分担するようにした。発達障害の子をもつ親や、パートナーの集まりにも参加した。「私たちは選ばれたんですよ」と言う誰かの言葉が心に残った。息子はその後、「発達障害の疑い」と診断を受け、小学校では特別支援学級に通うことにした。

妻の「ぶっ飛んだ出来事」は今も日常茶飯事である。冷蔵庫の野菜室に魚が入っていたり、洗面所の蛇口に水中メガネがかけてあったり……。妻の再就職に向けた練習や子どもの発達の問題等、悩みはつきない。でも家族の困難も今は「チーム」として乗り越えていける。



とれたて直送便

「感動が記憶に残る！」



5月にある園をお邪魔した際、ひまわりの種を植えていた子どもたち。先日訪ねたとき、私の顔を見るなり「見て、ひまわりが咲いたよ」とうれしそうに教えてくれた。みんなで協力して主体的に取り組んだこと、心を込めたことは、記憶に深く残る。我慢して勉強している状態では、どんなに頑張っても記憶力は働かない。どんな体験で記憶したかが、記憶の強さを左右する。好きな先生に言われたことや友達と一緒に感動した体験が、記憶を強くする。